

樟蔭女子専門学校国文科「国語」試験問題の翻刻と紹介(1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白川, 哲郎, 本間, 悦江, 宮本, 愛美, 吉田, みなみ メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4681

樟蔭女子専門学校国文科「国語」試験問題の翻刻と紹介（1）

白川 哲郎

国文学科 三年生

本間 悦江

宮本 愛美

吉田 みなみ

はじめに

本稿は、樟蔭女子専門学校（以下、「樟蔭女専」と記す）『検定ニ関スル試験問題集』の中から、国文科で実施された「国語」試験問題のうち、昭和三（一九二八）年度から昭和十三（一九三八）年度にかけての問題を翻刻、紹介するものである。なお、昭和一一年（一九三六）度の問題を掲載していないのは、その年度に卒業を迎える学生が〇名で国文科の試験そのものが実施されていないことによる。¹⁾

樟蔭女専『検定ニ関スル試験問題集』（以下、『試験問題集』と記

す）は、昭和四（一九二九）年に樟蔭女専に対して認められた中等教員免許無試験検定取り扱いに基づき、中等教員免許の申請を行うに際し、文部省へ添付書類として提出された各年度の試験問題の控えを綴ったものである。綴られているのは、樟蔭女専の第一期生に対して実施された昭和三年度の問題から、樟蔭女専の最終年度にあたる昭和二三（一九四八）年度の問題までである。

さて、この『試験問題集』に載る国文科関係の試験問題については、既に、その概略を紹介し、若干の考察を行ったことがある。²⁾ また、昭和三年度の試験問題については、その全体を翻刻、紹介した。³⁾ しかしながら、これまでは紙数の都合もあり、試験問題で出題され

た作品の出版にまで遡って紹介することができていない。そこで今回は、国文科関係の試験問題において、「国語」あるいは「国文」と題された科目について、問題文のみならず、出題の対象となっている文学作品の該当箇所まで含めて翻刻、紹介する。なお、昭和四年（一九三九）度以降の試験問題についても、今後、翻刻、紹介して行きたい。

一 「歴史文化総合研究A」における

『検定ニ関スル試験問題集』翻刻の経緯と経過

本稿は、二〇〇九年度国文学科において開講された「歴史文化総合研究A」（以下、「総合研究」と記す）なる科目の成果であることについても強調しておかなければならない。今回の「国語」試験問題の翻刻、およびそれにもなう出典の確認等は、全て二〇〇九年度国文学科歴史文化専攻専門科目として開講された「総合研究」の受講生三名の手によってなされた。以下、「総合研究」において、『試験問題集』を翻刻するに至った経緯と翻刻作業の経過について、簡単に触れておきたい。

白川が二〇〇九年度に担当した「総合研究」では、女性史・ジェンダーに関わる課題を素材として、史料の分析・検討の方法を身につけることを目的とした。また、受講生が共同で史料の分析・検討を行い、それを総合しながら結果を導き出すという一連の過程を、実際に経験するという点についても重視した。そして具体的には、受

講生自らが学ぶ大学の母体であり、女子教育機関として九十年以上の歴史と伝統を有する樟蔭学園（以下、「学園」と記す）関係資料を分析・検討の対象とし、前記の目的を達成することを目指した。

学園関係資料が、極めて豊富な内容を有していることについては、これまでに何度も指摘してきた。そしてその豊富な内容ゆえに、さまざまな角度からの分析・検討が可能であることは、白川自身、これまで関わってきた学園資料の整理・分析の過程において、深く実感してきたところである。ただ半期という授業期間の中で、それを分析・検討し結果を導き出すという一連の過程をとまなうものとして取り上げるとなると、何らかのまとまりをもった資料群を選択する必要があった。二〇〇九年度はそこで、大学の直接の前身となる樟蔭女専において、どのような教育が行なわれていたか、という点について明らかにすることを目標として設定することにした。それに関わる資料の分析・検討作業を通して、日本近代の女子教育の一端に触れ、理解を深めることができれば、と構想したのである。そして分析・検討の対象とする史料としては、受講生にその目標とするところを、より身近なものとして感じてもらおうという意図から試験問題、すなわち『試験問題集』を取り上げることとした。

二〇〇九年度「総合研究」には、三名の学生が受講登録した。秋期に開講された授業では、最初に学園の概略を簡単に解説したあと、『試験問題集』に載っている試験が実際に行われた昭和初期の樟蔭女専、および学園の様子を実感として理解してもらうため、学園に遺る動画資料を順番に視聴したり、他の文字・画像資料についても

紹介する一方、『試験問題集』の翻刻作業に取りかかった。その際、「総合研究」が国文学科の専門科目であることから、翻刻の対象は、樟蔭女専国文科で出題された「国語」の問題に限定することとした。さらに、「国語」の問題が著名な文学作品の解釈や解説、鑑賞を主たる内容としていることを考慮して、問題文として出題されている文学作品の出典を確定することも必須の作業として求めたところである。

受講生による翻刻作業では、それに取っかかりかかった当初は、ペン書きされた文字そのものの解読に手間取ることもあったが、それに慣れると作業はスピードアップした。ただ時間と手間を要したのは、翻刻した問題文に取り上げられている文学作品の出典確定作業であった。取り上げられている作品が和歌の場合には、『国歌人観』を利用することで、比較的容易に出典となっている作品を発見することができたが、散文の場合には出典確定にかなりな困難をともなった。それでも出題した教員に関する情報などから推測して、出典作品をほぼ確定できた後は、索引を活用することで何とかその出題箇所に至ることができるようになって行った。しかしながら、そうした方法で対応できたのは『源氏物語』など、平安時代の作品までであった。とりわけ江戸時代以後の作品となると、出典作品の確定が難しく、インターネットの検索機能を利用して作者や作品をおおよそ推定し、その時点から古典文学全集等のページを実際にめくって、出題箇所を見つけ出すという過程を経る必要があった。今回、翻刻、紹介した問題の全ての出典を、まがりなりにも確定することができた

のは、三名の受講生による地道な出典確定作業の賜物であることを特記しておきたい。

こうした経緯と経過を経て形を成したのが、別掲の表「樟蔭女子専門学校 国文科「国語」検定試験問題（昭和三（一九二八）年度）昭和一三（一九三八）年度」（以下、「表」と記す）である。

二 昭和三（一九三三）年度国文科

「国語」検定試験問題の注目点

表を一覧すると、いくつかの注目すべき点を見出すことができる。以下、「総合研究」の授業時に、翻刻作業の結果をもとに討論した内容、あるいは翻刻作業中に交わされた情報などを基にしながら、昭和三（一九三三）年度国文科の「国語」の試験問題について、注目点を指摘しておく。

まず、「国語」という科目の特性から、ある意味当然であるが、作品の解釈、評釈を課す問題が圧倒的である。かつて指摘したように、豊富な知識と、それに裏付けられた正確な解釈が求められていると言えよう。

さてその際、出題されている作品は、度数としては『万葉集』が圧倒的に多い。『万葉集』からの出題は、和歌で一題あたりの分量が少なくなることからこうした結果に至るのであろう。それに続くのが、『源氏物語』と『古事記』である。それらに加えて井原西鶴の『世間胸算用』と近松門左衛門の作品、松尾芭蕉らの近世俳諧に

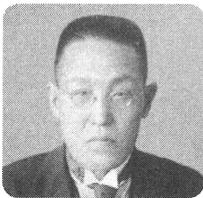
関わる出題が多い。古代の『古事記』『万葉集』、『源氏物語』、近世文学が出題の柱になっていることは間違いない。

この点に関しては、かつて白川が紹介した昭和三年度の樟蔭女專国文科『講義要目』の内容が想起される。ここでは、第二学年の学習内容として、「本学年ニ於テハ上古文及現代文ヲ主トシ近世文学ヲ併セ授ク」として具体的には、『古事記』『万葉集』、西鶴の『日本永代蔵』『世間胸算用』と『曾根崎心中』『冥土の飛脚』などの近松作品、『源氏物語』の絵合・少女・玉鬘・螢・梅枝・橋姫・東屋・浮舟・手習・夢浮橋、そして明治大正の文学が挙げられていた。大枠としてこの内容は、先の昭和三（一三）年度の「国語」試験問題の出題傾向と合致している。当時の樟蔭女專三年生の国語では、『古事記』『万葉集』、『源氏物語』、近世文学が教授内容の中心であったことが、試験問題からも裏付けられるのである。

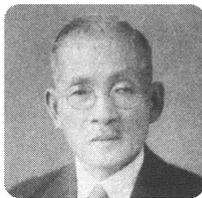
ところで、昭和三年度の『講義要目』には、明治大正の文学も挙げられていた。ただ、それについては、『古事記』『万葉集』や『源氏物語』、近世文学などの古典作品とは異なって、解釈・評釈などの形では出題されていない。それらは、「文学史」の中で出題の対象となったようである。表に併せて載せた「文学史」の問題内容にも明らかなように、昭和六（一九三二）年度以降になって、「文学史」の中で、明治以降の文学に関する論述問題が出題されるようになって⁽¹⁾いる。石川巧氏によれば、昭和四（一九二九）年度の東京帝國大学の入試問題における文学史の出題が嚆矢となり、近代文学を国文学の中に組み込む見方が定着させられていったとされる⁽²⁾。こうし

た近代文学が重視されるようになった当時の文学史の傾向を反映して、樟蔭女專国文科三年生向けの国語の教授内容として、明治以降の文学が、『古事記』『万葉集』『源氏物語』、そして近世文学に並ぶ柱となって行く過程を「文学史」の出題傾向から跡づけることができる⁽³⁾。言う。

次に、教科担当者、すなわち出題者別に問題内容を見てみよう。一見して、山口助治先生が『万葉集』、上原延蔵先生が『源氏物語』を教えられていたことが判る。そして、『古事記』と近世文学とを新町徳之先生が担当されていたと判断される。この三先生が、当時の樟蔭女專国文科の国語教育の中心であったことは間違いない。ただ、そうした出題傾向が突然が変化する年がある。それが昭和一二（一九三七）年度である。山口先生が『古事記』を、上原先生が近松作品を出題されているのである。この年度は、新町先生が問題を⁽⁴⁾出題されていないことを考慮すると、何らかの事情で新町先生が三年生の「国語」を担当されなかったことによるものかと推測されるが、それ以上のことは現在のところ不明である。



新町徳之先生



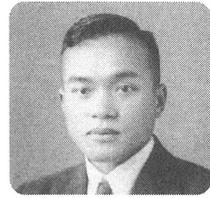
上原延蔵先生



山口助治先生

ところで、出題者別の問題内容で注目されるのは、武田宗俊先生の存在である。

武田先生は、昭和一〇（一九三三）年度に初めて出題者として現れるが、その年度の「国語」で『大原御幸』『砧』『松風』と、謡曲を出題されている。表を見ると、



武田宗俊先生

謡曲が出題されること自体、それまでの出題傾向からすれば、異例の出題であることが判る。武田先生が国文科を対象とする問題を出題されているのは、この昭和一〇年度から昭和一三年度までの間である。¹⁶この間、「国語」と「文学史」を出題されている。既に述べたように「文学史」では、昭和六年度から明治以降の文学についても取り上げられているので、その流れの中に位置付けて考えることもできるが、そうした中にも昭和一三年度には、菊地寛（1888～1948）や芥川龍之介（1892～1927）という、当時とすれば「同時代」の作家が取り上げられており、言ってみればその現代性が目を引く。

さらに昭和一二（一九三七）年度の「国語」の問題で武田先生は、『堤中納言日記』を取り上げる一方で、菊地寛『父帰る』・山本有三『海彦山彦』・岸田國士『紙風船』といった大正期の戯曲作品を取り上げている。これもまた、それまでの「国語」試験問題の出題傾向にあっては極めて異質である。さらに翌昭和一三年度の「国語」では、芥川龍之介の「或日の大石内蔵助」（大正六（一九一七）年）を取り上げており、その異質さが続いている。従来の「文学史」に

おける出題だけでなく、「国語」においても明治期以降、それも当時とすれば「同時代」とも言えるような作家や文学作品を取り上げていることを考えると、武田先生は、樟蔭女専国文科の国語教育に新たな風を吹き込み、より豊かな内容を付け加えた存在として注目しに値するであろう。

最後に、「国語」試験問題と戦争との関係について触れておきたい。これまでに白川は、樟蔭女専の試験問題に見える戦争の影響について指摘してきた。¹⁶国文科の試験問題に關しても、「文学概論」や「国語学」の問題に、その影響を指摘した。そしてその際、豊富で正確な知識に基づき、作品の解釈や評釈を求める「国語」や「漢文」の試験問題では、戦争による大きな変化を見出すことは難しいとも述べた。¹⁷今回試験問題を紹介した期間については、戦争は始まっているものの日米開戦以前でもあり、時期の点からしても戦争の影響を見出すことはなかなか困難である。そうした中において、昭和一二年度上原先生出題の問題の中で、「国姓爺合戦と日本精神に就て述べよ」なる出題がなされていることには注意を払うべきかもしれない。¹⁸昭和一二年度の試験が実施されたのは、翌昭和一三年三月前半である。昭和一二一年七月の盧溝橋事件に端を発する日中戦争の開始以後、樟蔭女専においても戦争の影響が窺われることについては、これまでも指摘してきたところである。¹⁹問題文中に「日本精神」なる用語が登場し、文学作品との関係からとは言うものの、それについての論述が求められることには、それまでの「国語」試験問題の出題傾向、さらには出題者である上原先生の出題傾向からすると

違和感を感じさせる。やはり昭和一二年九月に始まった「国民精神総動員運動」との関係を連想せずにはいられない。昭和一三年二月一日（紀元節）から一七日までの一週間実施された第二回目の「国民精神総動員強調週間」では、紀元節を機として「国民精神総動員ノ中核タル国体観念ノ明徴、日本精神ノ昂揚ヲ強調」することが目指されていた。⁽¹⁸⁾「日本精神」という用語に関連を見出そうとするのは牽強付会に過ぎるであろうか。

右のような観点で昭和一二年以後の「国語」の問題を改めて見ると、昭和一三年度に新町徳之先生が「新坂に武士道いまだ地に落ちず」という川柳の鑑賞を出題していることも目を引く。「武士道」なる語が使用された川柳の解釈が問われている点、さらにはこの川柳で詠まれている主題が、明治天皇に対して殉死した乃木希典である点などを考えると、そこに戦争の影響を見出すこともあながち無理な想定ではないように思われる。

むすびにかえて

以上、二〇〇九年度「総合研究」において行った樟蔭女専国文科「国語」試験問題翻刻作業の成果を紹介し、それに基づく若干の考察を行った。繰り返しとなるが、本稿で翻刻、紹介した試験問題は、全て「総合研究」の受講生の手によって成された。また、前章における考察も、文責はもちろん白川にあるが、戦争との関係についての論述を除けば、「総合研究」の授業の中で行われた受講生による

考察や、翻刻作業中に交わされた情報に基づくものである。その意味においても本稿は、国文学科歴史文化専攻専門科目「歴史文化総合研究A」の授業の成果である。

かかる授業の成果によって、樟蔭女専における教育内容の実態を明らかにし、記録に残して行く作業にわずかも寄与することができればこれに過ぎる喜びはない。冒頭でも述べたように、未だ完成していない昭和一四年度以降の試験問題の翻刻、紹介は、今後果たすべく努力したい。また、「国語」の試験問題は、国文科以外の問題も存在しており、それらを含む樟蔭女専全体の「国語」試験問題に関わる考察も、今後深めて行きたい。

〔付記〕

本稿は、二〇〇三～二〇〇九年度大阪樟蔭女子大学特別研究助成費による成果の一部である。

〔注〕

- (1) 昭和一一（一九三六）年度に卒業を迎える学生の入学年度は昭和九（一九三四）年度であるが、その年、国文科の入学生は0名であった。
- (2) 『検定ニ関スル試験問題集』については、白川「十五年戦時期の女子専門学校国語試験問題」〔『大阪樟蔭女子大学論集』第四六号、二〇〇九年（以下、この論文については、「白川09」と表記する）〕二ページを参照されたい。
- (3) 白川09（前掲注2）。

(4) 白川「昭和初期の樟蔭女子専門学校国文科―昭和三年の『教授要目』と『検定三関スル試験問題集』から―」(『樟蔭国文学』四五号、二〇〇八年)。

(5) 同様の作業は、国文科で出題された「漢文」についても必要とされていると認識するが、未着手となっている。また、国文科以外の学科で出題された「国語」についても当然同様の作業が必要であるが、それについても未着手のままである。

これら残された課題についても今後果たして行きたい。

(6) 昭和一四(一九三九)年度は、昭和一一(一九三六)年度と同様に対象となる国文科の学生が0名のため、試験が実施されていない。そのため実際に翻刻・紹介することが必要となるのは、昭和一五(一九四〇)年度以降の問題となることを注記しておく。

(7) 学園には、学園創設期から昭和一〇(一九三五)年頃までの学園内の様子や運動会などの学校行事を撮影した動画が遺されている。それらは現在、『樟の葉蔭で』と題するDVDとして整理されており、学園広報室から借り出して、視聴することができる。

(8) 表には、以下の論述の参考のために「文学史」の問題も併せて載せた。

(9) 白川09三(四ページ)。

(10) 白川「昭和初期の樟蔭女子専門学校国文科」(前掲注4)

(11) 樟蔭女専国文科の国語教育における明治以降の文学の取り扱

いに関しては、白川09四ページも参照されたい。

(12) 石川巧『「国語」入試の近現代史』(講談社、二〇〇八年) 六三ページ。

(13) 白川09所載の表「検定試験問題(国文科)一覧」参照。

(14) 白川09・「十五年戦争期の女子専門学校『家事』試験問題」(『大阪樟蔭女子大学論集』四七号、二〇一〇年)。

(15) 白川09四(六ページ)。

(16) 白川「昭和一二年度の樟蔭学園」(『大阪樟蔭女子大学論集』四五号、二〇〇八年) 所載の第3表「樟蔭女子専門学校教務日誌抄出」(昭和12年1月～昭和13年2月) 参照。

(17) 白川「樟蔭學報」に見る昭和戦前期の樟蔭学園」(『大阪樟蔭女子大学論集』四三号、二〇〇六年)・「昭和一二年度の樟蔭学園」(前掲注16)。

(18) 「国民精神総動員運動第二回強調週間実施要綱」(吉田裕・吉見義明編『資料日本現代史』一〇、大月書店、一九八四年) 六六ページ。

国語	山口助治	一、なまよみのかひのくにうちよするするがのくにとこぢぢのくにのみなかゆいでてるふじのたかねはあまぐもいゆきははかりとびもとびものほらずもゆるひをゆきもてけちふるゆきまもてけちついでいひもえずなづけもしらにあやくもしますかみかませのうみとなづけてあるもそのやまのつめゆるみぞふじかはとひのわたるもそのやまのみづのたぎちぞひのものやまとのくにのしづめともいいますかみかまとからともなれるやまかもするがなるふじのたかねはみれどあかぬかも(詠不盡山歌一首 茲短歌) ふじのねにふりおけるゆきはみなづきの もちにけぬればそのよふりけり ふじのねをたかみかしこみあまくもも いやきはばかりたなくくのを	『万葉集』巻第三 319・320・321	
		二、思はずもそこありえむ やさめるよのいめに君が見えざらなくに(應用) 右評釋	『万葉集』巻第十五 3735	
文学史	武田宗俊	三、万葉集巻五以下各巻について知れる所を簡単に記せ 一、尾崎紅葉と幸田露伴の作風を述べ比較評論せよ 二、藤村の小説について 三、左につきて簡単に記せ 牧水、 碧梧桐、 長塚節、 桐一葉、 齊藤緑雨、 福地桜痴	『万葉集』巻五以下 尾崎紅葉・幸田露伴 島崎藤村 若山牧水・川東碧梧桐・長塚節・坪内逍遙・斎藤緑雨・福地桜痴	
	国語	上原延蔵	一、聖だつ人才ある法師などは世に多かれど餘りこはいしう氣遣けなる宿善の僧都僧正のきは世に暇なく生直にて物の心を問ひ願さむも事々しう覺え給ふ又その程ならむ佛の御弟子の思むことを保つばかりの尋きはあれどけはひ卑しう言葉たみて骨なげに物馴れたると物しくて晝はおほや物事に暇なくどしつしめやかなる宵の程氣近き御枕上などに召入れ語らひ給ふにもいと流石に物づかひうなどのみあるをいとあてに心苦しき様して宣ひつる言の葉もおなじ佛の御教をも耳近きたとひに引き寄せいとよなく深き御懐はあらねどよき人は物の心得給ふ方のいと殊に物し給ひければやういゝ見馴れ奉り給ふたび毎に常見奉らまほして暇ななどして程ふる時は恋しう覺え給ふ 二、大人びたる人々召出でうしろ安く住つまふれ何事もとよりか安く世に聞えあまじ際の人にはの衰へも常の事よど紛れぬべかめりかる際になりぬれば人は何とも思はざらめど口惜しうさすらへも契辱ないどほしき事む多かるべき物寂しく心細き世を終るは例のことなり生れたる家の程を控のまににもてなりたむなむ聞き耳にも我が心地にも通なくば覺ゆべき賑はしく人数めかむと思ふともその心にも叶ふまじき世とならばゆめいゝ軽たく善からぬ方にもなして聞ゆなど宣ふ	『源氏物語』橋姫 『源氏物語』権本
		新町徳之	一、それ(書ど)をつれいゝせめてあまりぬる時一つ二つひきいで見侍るを女房あつて御前はかかおはすれば御さひはいは少きなりなで女かまんなふみはよむ昔は経よむだに人は制しことしりうごちいふをきよて侍るにも物思ひける人の行来いのち長かるめるよども見えぬめしめなりといはまほしく侍れど御もひくまなきやうなり 二、鑑賞 イ、単座に智くぬてはうち破り いのちうれき撰集の少口、富士ひとつ理みのこして若菜ななめでたさも中位なりおらが春 ハ、三代目伊勢屋敷に二両だしうなされる薩主約木でつつつかれ 新坂に威士道いまだ地に落ちず	『紫式部日記』 『猿蓑』松尾芭蕉・向井去来 与謝蕪村『あけ鳥』 小林一茶『おらが春』 『群風柳多留』80篇31 『群風柳多留』86篇2 井上剣花坊
国語	山口助治	一、衣ノ文字假名交り衣ニ着キ夜ノ解釋セヨ 天皇上幸之時、黒日齋御歌曰夜麻登弊遣、爾斯布岐阿宮旦、攻毛婆那禮、曾岐袁理登母和禮米夜、又歌曰夜麻登弊遣、由波波多賀都麻許母理豆能、志多用理豆能志多用(?)波閉都都、由以閉都都(?)由以波多賀都麻 二、爾天皇、御立其大后所坐殿戸、歌曰、都藝泥布、夜(麻・脱力)斯呂賣能、許久波母知、宇智須意富泥、佐和佐和爾、那賀伊勢勢許曾、宇知和多須、夜賀波延(那・脱力)須、岐伊理麻韋久禮。	『古事記』仁德天皇 『古事記』仁德天皇	
国語	武田宗俊	芥川龍之介の或日の大石内蔵之助を評せよ	芥川龍之介『或日の大石内蔵助』(大正6年)	
文学史	武田宗俊	一、夏目漱石の文学について 二、菊池寛 芥川龍之介の文学を論ぜよ	夏目漱石 菊池寛・芥川龍之介	

文学史	徳山権三	一、河竹黙阿弥の明治期に於ける劇作に就て概説せよ 二、北村透谷とその詩について概説せよ 三、島崎藤村の詩業について概説せよ 右の内二項を満ち認めること	河竹黙阿弥・明治期の劇作 北村透谷 島崎藤村
国語	上原延蔵	第一問 評釈 一、宮世の中をかりそめのことと思ひ取り、厭はしき心のつきそむることもわが身の(に)恠(へ)ある時なべての世の怨めしう思ひ知るははじめありてなむ 道心もおこな業なめるを年若く世の中思ふに叶ひ何事も飽かぬ事はあらじと覚ゆる身の程にさした後の世をさへたり知り給らむがかり難よそここにしべきと厭ひ難れなくと殊更に仏などの勧めもおもひ給ふやうなる有様にしておのずからこそ静なる思に叶ひけど残少しかく心地するにはかはしかくもあらで過ぎぬめかんめるを来方行く末 更にえたとる所な思ひ知らるるを 却りては心恥かしげなる法の友にこそは物し給ふなれと置か	『源氏物語』橋姫
国語	上原延蔵	第二問 解説 二、あまた年耳なれ給ひにし河風もこの秋はいとはしたなく物悲しくて御はてのこ急がせ給ふ大方あるべかし事どもは中納言殿阿闍梨(など)とぞ仕え(う)まつり給ひける 中には法服の事経の飾(り)こまかなる御あつかひを人の聞ゆるに從ひて當み給うふもいと物はかなくあはれにかかるよその御後見なからましかばと見えたり 自らもうで給ひて今はと脱ぎ捨て給ふほどの御とぶらひ浅からず聞こえ給ふ阿闍梨もここに参れり名香の糸ひき乱りてかくても経ちぬるなうち語らひ給ふほどなりけり	『源氏物語』総角
国語	山口助治	一、今は春のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知りてはて親のものへあてまゐりなどせでやみにしるもどかし思ひいとでらあるれば今はひとへにゆたかなるいきほひになりて二業の人をも思はずまにかしきおほしたて我身もみらくの山につみあまるばかりにて後の世(まで)の事も思はむと思ひはげみて十一月(霜月)廿九日山にまゐる 二、更級日記を読み終へて 三、八月ばかりに太秦に籠るに一条より詣つる道に男軍二つばかり引きたてて物へ行くに諸とも来てべき人待つなるべし過ぎていくに隨身だつものをおこせて 花見にゆくときみを見を載 といはせられたばかりのほどことは答へ(いらえ)ぬもびんなしなどあれば 千くさなるころならに秋の野の とばかりいはいはせていき過ぎぬ	菅原孝標女『更級日記』 菅原孝標女『更級日記』 菅原孝標女『更級日記』
昭和10年度	新町徳之	一、通釈 イ、人は武士柱は檜の木 魚は鯛とよみ置ける世の人の口における巴かさまざる物ずきはあれども此の魚をもて調味の最となせむに咎あるべからず 糸かけて台にすゑたる男振さへれに似るべくもなしさらば夷三郎殿も他の業武者にもかはずだ是にこれに社釣もたれ給へ ロ、二番草取も果さず腹出て 灰のうち叩く うるめ一枚 此の筋は頼も見しらず自由さよ ハ、三代目伊勢屋暫に就面不出 語釋 桑年 弦めそ、 十圍子 板がえし、 こま金	横井也有『鶉衣』染魚腹 『猿蓑』向井去来・野沢凡兆・松尾芭蕉 『註風柳多留』 80頁31
国語	武田宗俊	一、シテ、なかなかなほま奈秋の閑浮の世を忘れもやで浮名をまた漏らせはもるく涙の色袖の風色一つつまじや 地謡 とは思へども法人同じ道にと頼むなり 上歌 一念の窓の前に撮取の光明を期つ十念の柴の炬には聖衆の来迎をまちつるに思はざりける今日の暮古に帰るかなとお思出の涙かな 二、地謡 衣に落ちつ松の声 衣に落ちて松の声 夜寒を風や知らずらん シテ 音信のき稀なる中の秋風に 憂きを知らする夕な遠里人も眺むらん誰か世と月よも問はし シテ 面白の折柄や 嘆も秋の夕つ方 地 杜鵑の声もすさまじく見ぬ山里を送りて構は何れ一葉散る空すさまじく月影の軒のしのぶにつらひて露の玉たれかかる身の思ひをのぶるよすがらかな 三、汐波車僅なる浮世に廻るはかなきよ 波こことも須磨の浦日さへ濡らす秋かな 心つくの秋風に海は少し遠けれどまかの行平の中納言 聞きこゆると詠め給ふ浦色の波の夜たはげに音近き海士の家里離れたる道づの月より外は友もなしげに浮世の業かなに珠につたなき海士小舟のわたりかねたる夢の世に逢むとはいはれんうたかたの汐波車よるべき身は海士人の袖とも思ふ乾さん心かな	謡曲『大原御幸』 謡曲『砦』 謡曲『松風』
文学史	徳山権三	一、河竹黙阿弥/明治期二ケ於ル劇作二就イテ 二、高山樗牛/明治中期/浪漫的理想/勲勲ト關係 三、明治中期の詩壇各派/概説 右ノ中二題ヲ撰ビ概説セヨ	河竹黙阿弥・明治期の劇作 高山樗牛 明治中期の詩壇
国語	上原延蔵	一、げにや安樂世界より今此の娑婆に示現して我らが為の觀世音仰ぐも高し高き屋に登りて民の願ひを契り置きて難波津や三つづと三津の里れ所々々の靈地靈佛巡礼は罪も夏の霹靂苦しと驚籠をはやおりはの乞ひ目三六の十八九なるかほよ花今咲き出しの初花に笠は被すとも召さずとも照る日の神も男神よけて日負けはよもあらじ頼みありける順礼道西國三十三所にも向ふと聞くと有難き 二、大名に生るゝ種の一粒が何萬國(石カ)ぞ幾萬人。 坂は照るゝ鈴鹿は曇る所山あひの土山雨がふる 西は百味の旅籠屋に觀音勢至手をとりて蓮の臺に泊らんせ 三、國姓爺合戦と日本精神に就て述へよ	近松門左衛門『曾根崎心中』 近松門左衛門『丹波や作侍夜の小屋節』 近松門左衛門『國姓爺合戦』
国語	山口助治	一、天皇高山に登りまして四方の國を見したまひて詔りたまひつらく國中に烟たらず國皆貧しかれ今より三年といふまでは悉に人民の課役をゆるせとのりたまひき後國を見したまへば豊に畑満ちたりきかれ人民富めりと思はれて今はと課役おほせたまひきこをもて人民榮えて役使に苦しまざりきかれ御代をたへてひじりの御代と謂す。 右漢字に假名をつけ、簡單に説明。 二、黒姫の載れる歌(仁徳天皇に) 夜麻登弊遣由致波多賀麻許母理豆能志多用波閉都都由久波多賀都麻(讀み方と評釋) 三、豊の樂。 豊の明。 おすひがね。 くしろ。 ひちまき。 しどまん。 たどむき。 大君ろかも。 たはる。 やまがた。 右語句の假義。	『古事記』 『古事記』 『古事記』
昭和12年度	武田宗俊	一、「父帰る」海産山彦」紙風船」三戯曲を比較評論せよ 二、月にははかれて夜深く起きにけるも思ふらむところいとはしけれど立ち歸らむも遠きほどなればやうやう行くに小家などには例音なふもの聞えず限なき月に所々の花の木どももひとへに混いりておく霞みり今少し過ぎに見つる面白く過ぎ難き心地して そなたへ行きもやられず花櫻にほふ木陰にたちよられつとち誦してはやくここのもの書ひし人ありと思ひ出でて立ち休らうに菜地の崩れより白きものいたう喰さつといづめり	菊池寛「父帰る」(大正6)、山本有三「海産山彦」(大正12)、岸田國士「紙風船」(大正14) 『埋中納言物語』花桜折中侍

国語	上原延蔵	評釋 一、かかる程に住み給ふべき宮境けにけりいとどき世に浅まうあへなくて移ろひ住み給ふべき所のよしきも無かりけれは宇治といふ所によしある山里持給へりけるに渡り給ふ思ひ捨て給へる世なれども今は住み難れなむをあれはに思る綱代のけは近く耳かきましきわたりて静かなる思に叶はぬ方もあれどいかがはせむ花紅葉水の流にも心をやる便に寄せていとどし詠め給ふより外のことなりか絶え籠りぬる野山の末にも昔の人もし給はましかばと思ひて聞え給はぬ折なかりけり	『源氏物語』権姫
		二、月をかきほどにきりわたれるを眺めて人々あたり内なる人ひとりには柱に少しあかくて琵琶を前におきては手まぎりしつづつあたるに響がくれたりつづつ月のにはかにいとしあかくし出でてれば扇ならでこれしとも月は招きつづかりけりとさしのぞきたる顔いみじくらうたげに匂ひやなるべしそふしたる人は琴のうにかたがきかかりて入る日を返すばちこそありけれさまことにも及び給ふ御心かなとちう笑ひたるけはひ今少しおもしろかによしづきたり	『源氏物語』権姫
昭和8年度	山口助治	評釋 一、あきつみわがおほきみのあめのしたやまのうちにくにははしもおほくあれどもさとははしもはたあれどもやまなみのよろしきにくにははなみのたちあふさとやましろのかせやまのまにみやばらふとどしきたちちかかしらふたぎのみやはかはちかみせのとぞきよきやまちかみと里がねとよむあきさればやまもとどろにさましかはつまよびとよめはるさればをかべもしじこいはほにほはなき給ふを里あなにやしふたぎのほらあなたふとおほみやところうへしこわかおほきみはきみのまにきこしたまひてさすたけのおほみやとことさだめけらしも みかのはらふたぎのぬべきよきまそおほみやとところさだめけらしも やまたかかかはせきよしもよまよかみしみゆかむおほみやとところ 二、春のそのくれなぬにほふ桃の花したてるみちにていたつとどのわががそのすももの花か庭にちはだれのいまだ残りたるかも 右評釋 同時に大伴家持の歌について簡単に記せ	『万葉集』巻第六 1050・1051・1052
		『万葉集』巻第十九 4139・4140 大伴家持	
国語	新町徳之	評釋 漢字二八讀ろ殿名ヲ附せ 一、故各々依ざし給へる命のまにまに知し看す中に遠須佐の男の命所命したまへる國を知らせて八拳鎮上前に至るまで啼きいさちきその泣きたまふ山は枯山なす泣き枯し河海は悉に泣き乾きここをもて悪ぶる神の音なむ強難なす皆海蓋の妖惑にかりきか伊那那岐の大御神遠須佐の男の命に詔りたまはく何ともか女は事依させざる汝は事依させざる國を治らざるて哭きいさちとのりたまへ答白したまはく僕は此の國祖の聖洲國に籠らんと欲ふが故に哭くとまをしましたまひき 語釋 一、こと天つ神、五百津眞賢木、八十毘良迦、頭椎の大刀、事戸を度す	『古事記』須佐之男命の啼きいさち
		『古事記』	
国語	新町徳之	解釋 一、今の商賣の仕かけ世の偽りの問題なり貴目が物を買へ八貫目らうりて銀ますしする才づつまる所は内證のよはり来年の暮には此門の戸に賣家十八間口藏三ヶ所戸立く其のまふ上中二老百四十疊外に江戸船一年五人乗の御座ふね通ひ舟付て寅申検來正月十九日に此町の會所にて二老をひらくと沙汰せられ皆人のものになる 二、善はいそげと大晦日の掛をすばしくこまはせける今日の一ひ日鏡のわらじを破り世界をいだてんのかけ廻ることと商人は勢ひとつのものそかし	井原西鶴『世間御算用』『問屋の寛間女』
		井原西鶴『世間御算用』『年の内の餅はなは詠め』	
文学史	徳山健三	一、与謝野晶子の短歌について概説せよ 二、明治中期の俳壇の情勢を記せ	与謝野晶子 明治中期の俳壇
国語	上原延蔵	一、評釋 御念誦の隙たにはこの君達もあそび給うやういとおよづけ給へば琴習はし碁打ち眉つぎなどはかなき遊業につけても心ばへども見奉り給ふに姫君はらふいしく涙(おもも)うはらうにつきかき若君はおどかにうたげなるさまして物づみしたるけはひいと美しう様々におはす春のうららかなる日影に池の水鳥どもか羽うちかはしつのおがいはく囀る聲どもを棠はほかきことい見給しはごどもつがひ離れぬを羨ましくながめ給ひて君達に御琴ども教へ聞え給ふいとをかきしげに小さき御程々にとりどりのかなし給ふ物どもあれはにをかし聞ゆれば涙をうけ終て うちすて つがひきりし 水鳥の かりこの世に たちおくれむ 心盡しなりやと目押し拭ひたまふ。	『源氏物語』権姫
		二、解釋 おはしましう世にこそ限ありて片ほならむ御有様はいとほしくなど古代なる御うるはしきに思しも滞りつれ今はかまた頼なき御身どもにていかにもいふに上りに懸給へらむをあながちに誇り聞えむ人は却りて物の心も知らずいふかひなきことにこそは危らぬ(あらぬ)いかなる人かいたくて世を過ぎ果て給ふべき松の葉をすきて動むる山伏たに生ける身の捨て難きによりてこそ佛の御教をも遣々別れては行ひなすなれ	『源氏物語』絳角
昭和9年度	新町徳之	一、解釋(漢字二八讀ろ方施せ) 甲、汝等八塩折の酒を醸しまた垣を作り置しその垣に八つの門を作り門毎に八つの佐受岐を結びその佐受岐毎に酒船を置きし船毎にその八塩折の酒を盛りて待ちよ 乙、樓は國のまほろばらとなつて菅垣山こもれる優しうるはし命のまじりむ人はたよみとも平群の山の熊白橋が葉を響きに挿せその子 二、讀方 甲、阿米都都知料理麻呂登登料理佐佐流斗米 乙、爾比那閉夜爾淡斐陀尼流毛毛陀流都都紀貫延波本都延波阿米袁淡弊理那加都延波阿豆麻食(淡・厥力)弊理志豆延波比那袁淡弊理 一、左の五語を選び解釋すべし 具足、 七半の蔵、 鶴御前、 仕懸山伏、 提節、 務務分、 目安、 角前髪、 御火焼、 さい目論、 削掛の神事、 大間の守(行)燈、 節季候、 節季候、 食酒、 御家流、	『古事記』天照大御神と須佐之男命 『古事記』景行天皇
		『古事記』神武天皇 『古事記』雄略天皇	
国語	山口助治	一、評釋 たまきはるうちのかきはりは平けて安くもあらむをこなくもなくもあらむをよのなかのうけくつらけいとどきていきすにはからしほをそぐちらふこととすまはしもおもきうまにうはらうにつきかき若君はおどかにうたげなるさまして物づみしたるけはひいと美しう様々におはす春のうららかなる日影に池の水鳥どもか羽うちかはしつのおがいはく囀る聲どもを棠はほかきことい見給しはごどもつがひ離れぬを羨ましくながめ給ひて君達に御琴ども教へ聞え給ふいとをかきしげに小さき御程々にとりどりのかなし給ふ物どもあれはにをかし聞ゆれば涙をうけ終て うちすて つがひきりし 水鳥の かりこの世に たちおくれむ 心盡しなりやと目押し拭ひたまふ。	『万葉集』巻第五 897
		『万葉集』巻第五 899 『万葉集』巻第九 『万葉集』 『万葉集』巻第十六	

昭和5年度	国語	田井嘉藤次 一、左の文を釈義せよ 「此の葦原/中ノ國、命の隨に既に敵らむ。唯僕が住所をば、天ツ神の御子の天津日知知らしす、登院流天之御象如して、底津石根に宮柱布斗斯理、高天ノ原に永多如斯理て治め賜はば、僕は百足足らず八十ノ損手に隨りて侍ひなむ。亦僕が子等八十ノ損手に、亦八重事代主神、神の御眼前と為りては仕え奉らば、違う神はあらじとまをきて、乃ち造りましき。」 二、左の語義を訳せ 「しらす」「うしはく」「百取の机代物」「塩盈珠・塩乾珠」	『古事記』葦原中国のことむけ
	山口助治	左ノ評釈 イ、みもろのかむなび山にいほえさしじに生いたるつがの木はいやづきに、玉かづら絶ゆることなくありつてもやまず通はむ飛鳥の古き都は山たかみ川とほじろし春の日は山し見がほし秋の日は川しきやけしあさぐもに、たづはみだれたざきりにはかばづかく見るごににねのみしなかく古おもへばあすか川かはよどさらずたつつきりのおもひすくべきひにあらなくに。 ロ、やきつべに吾が行きしかばするがるるあべのいちじにあひしとはらほ。 ハ、もふのふのやそうち川のあじろ木にいさよふなみのゆくへしらすも。 ニ、淡路のぬじまのさきのまかぜにいもがむすびしひもふきぬへす。 ホ、さかきにもてはふるふをうつたへにひとづまといへばふれぬものかも。 へ、わがなほもちなのいほなになちぬともきみがなたへばおしこみなけ。	『万葉集』巻第三 324・325 『万葉集』巻第三 284 『万葉集』巻第三 264 『万葉集』巻第三 251 『万葉集』巻第四 517 『万葉集』巻第四 731
昭和6年度	国文	上原延蔵 一、評釈 一、道ばかり横かまきまさはいづこのか侍らむにがし延喜の御手より彈き傳へたること三代になむなり侍りぬるをかう拙き身ににてこの世の事は捨て忘れ侍りぬるを物の切にいづき折々はかき鳴らし侍りぬるを怪うまねが者の侍ること自然にかの前王の御手に遣ひて侍れ山伏のひが耳に松風を聞きわたし侍るやあらむいかでこれ忍びて聞し召させてしな 二、評釈 二、十月になりて五六日のほどに宇治へまうで給ふ。あじろをこそこのころは御覽せめときゆる人あれど何かはそのひをむしにあらそふ心にあじろにもよらむとそぎず給ひてからかにあじろ車にてかどりのなほさしめぬまかせてとくらびき給へり宮まよろこひ給ひて所につける御あるじなどをかかしし給ふ事れぬればおほたなぶらちかくてさきさきし給へる文ともふかきなどあざりもさらじおろしてとせ給ふ	『源氏物語』明石 『源氏物語』橋姫
	国文	田井嘉藤次 一、大主護國ノ段二就キ思想上ノ感ヲ述ベヨ 二、左ノ文ヲ解釈セヨ 「塩盈珠を出して瀾らし、塩乾珠を出して活し」 三、全	『古事記』大主護國の国譲り 『古事記』火照命の服従
	新町徳之	一、通釋 一人は東海道關の地頭に近き旅籠屋の出女せし時木貫油の抜拵につらく當り米など盗みし科にや同じ世に頼いて米の乏しき鉢ひらき坊主となりて顔を殊勝らしく精進のことは作り外の空念佛思へば心の猿、狼に衣そかし精進のことは忘れて鬚の頭も信心からとて墨衣の麻衣を着る故に此十四五年も佛の御座にて毎朝修行に出でしに一節にて二十所つの中二十所を集めて漸く一合あり五十町かけ廻らねば米五合はなし道心も堅固になくはた助め難し過ぎに夏置籠を焼ひてせん方なく衣を質に遣さねばかその後うくることなりがたく渡世の種はつきける。	井原西鶴『世間御算用』『長刀はむかしし鞘』
	山口助治	二、語釋 釣御前、 腹はれ、 差粉、 投節、 虎落、 大間の行燈、 目安つけられ、 御殿屋敷、 幸木、 筋気候 三、三堂は人の守る山本べは馬酔木咲きまれば椿花咲くらうはし山ぞ泣く子守る山。 四、お照る難波の崎に引き登る舟のそほ舟そほふねに綱取りかけけらむづらひありな すれど言ひづらひありなみすれどありなみすれぞ言はえにし吾君。 三、み吉野の浦もどとろに落つる白波、とまりにしにも見せま欲しき白波(アル長歌の反歌) 四、何時はしもこひぬ時とはあらねども夕方までこひはずなし 五、こもりづの澤泉なる石が根も通て思ふ吾がこふらくは 六、近江の海沖つ島山おきまけて吾が思ふいもをこのしげけく。	井原西鶴『世間御算用』 『万葉集』巻第十三 3222 『万葉集』巻第十三 3300 『万葉集』巻第十三 3233 『万葉集』巻第十一 2372 『万葉集』巻第十一 2443 『万葉集』巻第十一 2439
昭和7年度	文学史	徳山健三 一、浮世草子 二、紀海音 三、明治期の観念小説	井原西鶴ら 紀海音 明治期の観念小説(泉鏡花・川上眉山)
	国語	上原延蔵 一、解釋 月のいと花やかにさしたるに今宵は十五夜なりけりと思し出て、殿上の御遊恋しく所々ながめ給らむむかしと思ひやり給ふにつけても月の顔のみまもれ給ふ二千里外人心と誦じ給へるに例の涙もとまらず入道の宮の霧や隔つと宣はせし程いはむ方なく戀しく折たふこと思ひ出て給ふによと泣かれ給ふ。 二、解釋と批評 入道かしまりて自らもをさし参らず物隔たりたる下の屋に侍ふるはあけくれ見参らまほしうあかず思ひ聞えていかで思ふ心をかなへむと佛神をいよよ念じ奉る年は六十ばかりになりたれといと清げにあらまほしう行てふらさほて人の程ではかなれどもやあらむうち慰みほれどいしき事はあれど古の事をも見知り物ぎたなからずぶづきなることもまじれど昔の物語などせさせて聞き給ふに少しづついひの紛れなり	『源氏物語』須磨 『源氏物語』明石
昭和7年度	山口助治	一、第十三・四・六ノ巻について概説せよ 二、解釋 一、あしはらの、みづほのくには、かむなから、ことあげせぬに、しけれど、ことあげぞわがする、ことさきく、まさきくませと、つみなく、さきくいまさば、ありそなみ、ありてもみむと、もへなみ、ちへなみしに【に】しき、ことあげするわれ。 反歌 しきまの、やまとのくには、ことだまの、たすくらくにぞ、まさきくありこそ。 ロ、あらたのまきへのはやくしなをたていゆきがつましいもききたりに ハ、はるのくに、かすみたなみき、うらがなし、このゆふかけに、うひすなくも。 ニ、わがやどの、いさゝむらたけ、ふくかせの、おとのかそけき、このゆふべかも。	『万葉集』巻第十三・十四・十六 『万葉集』巻第十三 3253・3254 『万葉集』巻第十三 3353 『万葉集』巻第十九 4290 『万葉集』巻第十九 4291
	文学史	徳山健三 一、幸田露伴ノ小説ノ傾向ヲ述ベヨ 二、明治中期ノ社会小説ニツキ概説セヨ	幸田露伴 明治中期の社会小説(民友社・高山樗牛・内田魯庵ら)

表 樟蔭女子専門学校 国文科「国語」検定試験問題
(昭和3(1928)年度～昭和13(1938)年度)

年度	科目名	担当者	問題内容	典拠・対象作家等
昭和3年度	国語	山口助治	一、左/評釈 葦原の瑞穂の園は、神ながら事挙げせぬ国、然れども言挙げぞ我する、言さきまさきくませと、つみななききくまさは、ありそ波、ありても見むと、百重波千重波しきに、言あげず、あれは 反歌 敷島の大和の園は 言葉のたすく国ぞ まさきくありこそ 二、左/各短歌/評釈 ませごしに 妻はむ駒の のらゆれど 猶し恋ふらくしひかかねつも。 天地に少し いたらぬますらをと 思ひしわれや 雄心もなき。 新治の 今作る路の さやかにも 聞きにけるかも 妹が上のことを。 み雪降る越の大山ゆき過ぎていずれの日にか 吾が里を見む。 いで我が駒早くゆきこそ待乳山まつらむ妹を 行きてはや見む。	『万葉集』巻第十三 3253-3254 『万葉集』巻第十二 3096 『万葉集』巻第十二 2875 『万葉集』巻第十二 2855 『万葉集』巻第十二 3153 『万葉集』巻第十二 3154
		上原延蔵	解説 一、宮に渡し奉らむを待るめを故姫君のいと情なく憂きものに思ひ聞え給へりしあたりにいとむげに児ならぬ齡のまだはかばかしう人のおもむけを見知り給はず中望なる程にてあまた物し給ふなる中のあるつらわしきにてや交はれしを春に過ぎ給ひぬるも思ひし敷きつる念もなきこと多く待るにかく備なきなげの御言の葉は後の御心もたどり聞えさせずいと鐘う思ひ給らぬめき折筋に侍りながら少しもなすらひなるやうにも物し給はず御年よりもあやしく若びて慣ひ給へればいとあははら痛く侍り 二、御心のまいに折らば落ちぬべき萩の露ひろはゞ消えなむと見ゆる玉篠のうへの霞などの艶にあかかなるすずしきのみこそおもしろ 三、朝に起きさせ給ふとも知らずと思し出づるにもなほ朝政は息らせ給ひぬべかり	『源氏物語』若紫 『源氏物語』帯木 『源氏物語』桐壺
昭和4年度	国文	新町徳之	一、讀方 麻岐年久能比呂乃美夜波 阿佐能比能傳流美夜由布比能比賀氣流美夜多氣能泥能泥陀流美夜能泥能泥婆布美夜夜夜本爾余志伊岐玉岐能美夜麻紀佐久比能美加度爾比那閉夜爾游斐陀呂流毛毛陀流都紀賀流波本都延波(阿・脱力)米袁游幣理那加都延波阿豆麻袁游幣理志豆延波比那袁游幣理 二、解釋 漢字ニハ假名ヲ附セヨ 其の女が持たる生大刀生目を以て汝が庶兄弟ともをは坂の御尾の追ひ伏せ赤河の瀬に追ひ撥ひて善羅大國主神と爲り亦平都志國玉神と爲りて其の我が女須世理鬘貴を嫡妻と爲て宇道能山の山木に底津石根に宮柱布刀斯理高天原に氷椽多迦斯理て居れば奴よ 三、解釋 近年は何方も女房家めし奢りて衣類に事もかかぬ身の其時の浮世模様は正月小袖をたくみ羽二重半冠四五枚の袖端より三種の細染百色ばかりの染髪は高く金・子一兩づつ出してこれさのみ人の自立たぬ事に金銀を持つて帯とでも普賢のの本縷子一領につき銀二枚が物を腰にままと一羽二重の目した袖今の重段の末にても帯三石玉窓にいただき濡具も本紅の二枚がさね白めぬ足袋はくど昔は大名の〇御前方にもあそさはさぬ事思へは斯人の女房の分として愛加忍しき事ぞかし 一、解釋 わたつみはあやしきもか迷路島中にたておきて白浪を伊豫にめぐらしあま月明石の門ゆはたされば潮を干しむ潮騒の浪をかしまあみあはち島嶼がりあて何時しかも此の夜の明けむと待つらにいの聲がてねば滝のへの渡野の燈明けぬとしたりとよむらしいごどもあへて漕ぎ出むにはも静け 反歌 島づたひみぬめの崎を漕ぎためばやと戀く鶴さはに鳴く 二、解釋 ものへの八十宇治川のあじろ木にいきよふ波のゆくへ知らずも。 大君の遠のみかどしありがよふ嶋門を見れば神代し思ほゆ。 わなめはも千名の五百名にたちぬとも君が名立たは惜みしこそ泣け。 焼津めにわが行きしかば駿河なる阿郎の市路に逢ひしらはも。 三、萬葉集卷十一、十二、十三、十四、十五、十六の巻々について簡明に解釋を記せ	『古事記』雄略天皇 『古事記』大國主神 井原西鶴『世間胸算用』「問屋の賞園女」
		山口助治	一、解釋 二十六彼岸のはてはよき日なりければ人知れず心づかひしていみじく思ひて率て奉る後の宮など聞しめしつけてはかへる御歩行いみじく創し聞え給へばいと煩はしき念に思したる事なればさりけなく侍と扱ふもわりなむ心船渡なども所狭ければ事々しき御禮なども借り給はずそのわたりいと近き庄の人の家にいと思ひて宮をばおろし奉り給ひておはしめ見賜奉るべきもなけれど宿直人は僅にいでありくにも氣色知らせじとなるべく例の中納言殿おはしますとぞ登賞しあり 二、全(解釈) 實に聞きよりも哀に候へ給る様よりはじめていと假なる草の瘠に思ひなしくぞざりて聞じき山木といへさる方にて心まりまへことのとやかなるもあるをいと荒ましき水の音波の響に物忘れうらし夜なと心解けて夢にだに見るへき禮もなげにすく吹き拂ひたり聖だたる御為には斯かにゆるしはそ心とまらぬ催ならぬ女君逢何心地して渡し給らむむ世の常の女しくなびたる方は遠くや推しははかるて御有様なり	『万葉集』巻第三 388-389 『万葉集』巻第十一 2714 『万葉集』巻第三 304 『万葉集』巻第四 731 『万葉集』巻第二 284 『万葉集』巻第十一・十二・十三・十四・十五・十六 『源氏物語』絳角 『源氏物語』橋姫
昭和13年度	文学史	徳山健蔵	一、お伽草子について概説せよ 二、談林派の俳諧に付て概説すべし 三、次の各項につき知れる所を記せ イ、草庵集、ロ、金平浄瑠璃、ハ、小澤蘆庵	御伽草子 談林派の俳諧 『草庵集』・金比羅浄瑠璃・小澤蘆庵
		上原延蔵	一、解釋 小侍従と辨とはなてはまた知る人侍らじ一言にてもまた異人にうちまねび侍らざく物かはりか数ならぬ身の程に侍れど夜屋かの御座につき奉りて侍りしかば自ら物の氣色をも見奉りそめしに御心よりあまりて思しける時々、只二人の中になむたまさかにも御消息の侍りしかばはら痛ければ委しく聞えさせず 二、評釈 世の中に久しくも覚え侍らねば明暮なかやまたじ御事をのみなむ心ぐるしく思い聞けるにこの人々もよかるべき様事と聞きこまきまいひ知らずめれば年経たる心どもにはざりと世の道理も知りたりむはかばかしくもあらぬ心ひとつを立ててかくてのみみは見奉らむと思ひなりやめしもありしかど今思ひもあはず恥かしくも思ふえは更に思ひかけ侍らざりしをこれやげに人のいふふる通れがたき御座なりぬいことにて苦しけれ	『源氏物語』橋姫 『源氏物語』絳角